

『宗国史』の面白さ

林屋辰三郎

中国では宗国というと、宗主国のような意味で、『春秋左氏伝』などに見え、要するに本家筋の国のことである。近世初頭、太祖藤堂高虎にはじまる藤堂家の、伊賀、伊勢など領国の歴史に『宗国史』と命名したのは、まずは編者の立場、封土の関係をたくみに考へてのことのようである。

『宗国史』は、編者が高虎の異母弟出雲高清から六代の藤堂出雲高文であつて、その分家の眼からみた本家の歴史という家族的な意識と、逆に高文家の家祖が初代の伊賀城代であり、しかも太祖高虎も伊賀国主として立身したから、郷国への編輯者の自負がまじりあつていふようにも思える。いわば藤堂本家の本貫を伊賀とする視点からの領国史なのである。

序にもいふように、本書の編集されたのは寛延四年(一七五二)で、その構成、文体はすべて『春秋』にならつて整備されているが、文中にその時期としては異様なほど藩の文字が頻出する。凡例によるとこれは『春秋』の都・邑に相当するものを府・藩の字をもつて代えたという。この藩の字は一般に云う幕府に対する藩屏の意ではなく、津府・伊府(上野)を中心に勢藩・伊藩などと表現されるのである。幕末になると天朝又は幕府に対する藩という体制が形成されるが、これはそれ以前に藤堂家の封疆を一つの世界として意識し、そのなかで府に対する藩を考へたものであつた。従つて全国的に『藩』国家の創出される過渡的な状況を、『宗国』の名で示したとも考えられる。

『宗国史』という書名一つをとらあけても、面白さは尽きない。太祖公高虎が大坂と江戸、公家と武家の調停に活躍して、歴史の舞台を動かした経緯はもとより、二代大通公高次、三代了義公高久の編年体の本譜は、遺書録・賜書録・封疆志などに収録された多数の文書と相まって、まことに得難い資料を提供してくれる。わたくしは公刊に至るまでの上野市古文献刊行会の方々には御礼を申上げ、本書を江湖におすすめしたい。

『宗国史』の刊行に際して

上野市長 今中原夫

昭和四十九年に「永保記事略」を、昭和五十一年に「廳事類編」上巻を、続いて昭和五十二年「廳事類編」下巻をそれぞれ出版してまいりました。そしていまここに、藤堂藩政史料の集大成ともいふべき「宗国史」の刊行をみるにいたりました。

「宗国史」は藤堂高虎の異母弟である藤堂出雲高清六代目の出雲高文(享保五年―天明四年)の編著であり、今回下巻には藩士に対する諸般の掟、通達を始め、百姓町人に対する掟、通達、覚書其他多く庶民に関する史料を集録しました。

本書は、上野市立図書館所蔵のものをもととして、嘗て、昭和十六年上野町教育会より刊行された「宗国史」をこのたび上野市古文献刊行会が、欠落を訂正し、新たに発見されたものを増補して刊行したものであります。

藤堂藩の領国はもとより徳川幕藩体制下における治政を知る重要な文献の一つであります。

さきにもその上巻を出版しましたが、今回引続き下巻が刊行されることになりました。「宗国史」の刊行が、各界から渴望されていただけに、上野市古文献刊行会の方々が、より正確なものをつくるため、或は東京に何度も足を運ばれるなど、並々ならぬ苦心を重ねられ、一年有余の歳月を費してこの偉業を成しとげられた労苦に心から敬意と感謝を申し上げますと共に、上野市の貴重な古文獻を更に一つ後世に伝えることの出来たことを衷心より喜ぶものであります。